No.42 The Lotus News
蓮通信
2008年12月4日 発行　通巻75号

蓮文化研究会 The Lotus Japan
〒171-0052 東京都豊島区南長崎3-9-23
事務局　ラポン・ファミイユ207　三浦功大 方
電話・FAX　03-3951-5630
URL　http://www.lotusjp.com
E-mail　tokyo@lotusjp.com

会員各位におかれましてはお変わりございませんでしょうか。今年も蓮文化研究会の活動にご協力をいただき感謝申し上げます。明年は理事改選の年に当たります。同封の用紙にご記入の上、投函下さるようお願い申し上げます。

第11回総会開催のお知らせ

日　時　2009年1月24日（土）
開　場　13時
総　会　13時20分～13時40分
引き続き蓮の情報交換会
講演会　14時30分～16時30分
講　師　北澤光太君「蓮の世界」
池上正治 理事
「埃及（エジプト）ロータスを観る」
場　所　豊島区立勤労福祉会館6階第7会議室
東京都豊島区西池袋二-三七-四
電話　03-3980-3131
懇親会　17時頃より池袋駅近くの居酒屋で、新年の懇親会を開きます。ご参加下さい。
会　費　四、〇〇〇円

＊総会及び懇親会にご出席の方は、1月15日までに同封ハガキにて事務局へご連絡下さい。
＊総会にご欠席の方は、1月20日までに同封の委任状にご記入の上ご返送下さい。
＊総会には、会員皆様の出席を願っています。会員間では、大半の方々がお互いに面識がありません。この機会にぜひ参加され、有意義な文化交流を戴きたいと存じます。

講師紹介

北澤光太君。千葉県花見川区に住む小学校5年生です。4年生と5年生の2年間、夏休みの研究課題に、蓮の花を選び、研究してきました。研究の「蓮の世界」が、千葉市小中特別支援学校児童生徒作品総合展覧会「科学部門」に選ばれ、9月学校を代表して、千葉科学館で展示されました。

池上正治理事。1946年新潟県生れ。作家、翻訳家。東京外国語大学中国科卒。在学中の1967年に初めて、中国に行く。その後、訪中は250回を超える。中国大陸の全ての省市区および台湾に足跡を印す。中国に関する著述、翻訳、講演のかたわら、東アジアの交流にも努める。著・訳・編著は60余冊。

新会員紹介（10月～11月に入会された方）

尾白直子　ギャラリー ぶら里　〒四〇八-〇〇三六
山梨県北杜市長坂町中丸1726
電　話　0551-32-5856
FAX　0551-32-5857

橋本孝公　〒六七九-一一一四
兵庫県多可郡多可町中区岸上360
電話　0795-32-2308

日景祐子　〒一〇三-〇〇〇四 日本ヴォアール
東京都中央区東日本橋3-5-3　1303
電話　03-5651-2923

明年は理事改選の年です。同封の投票用紙にご記入の上、12月13日までに切手を貼付し、投函下さい。また、総会の出席、欠席（欠席の場合は委任状）のはがきは、1月20日までに投函下さい。毎回投函率が低いので、ご協力よろしくお願いします。
「総会出欠のはがき」と、「理事投票用紙の封筒」は、別々に投函して下さい。

『蓮文化だより13号』一月末発行予定

会員各位に原稿をお願いしました『蓮文化だより13号』は、1月末発行予定で編集中です。今回は20名より玉稿をいただきました。特集はフランスの蓮です。フランスの蓮の花が咲いた経緯を、フランス在住の画家で会員の雅子・ヴィラーさんが紹介します。判型A4判、40ページ、オールカラーです。総会出席者には当日配付の予定です。欠席会員には2月初旬総会報告と一緒に発送の予定です。

会費納入について

2009年度の蓮文化研究会の会費の徴収は、次回の蓮通信を送付の時、振込み用紙を同封しますので、振込みは用紙到着後にお願いします。総会・会場に於いても、会費納入を受け付けます。

蓮のカレンダー頒布

宇都宮城跡蓮池再生検討委員会主催、「第六回栃木花蓮写真展」で上位入賞作品と、与謝蕪村の俳句を組合わせた、2009年版のカレンダーが出来ました。頒布します。

版形　A4判 16面
価格　1000円送料込み
申込・問合せ先
印南洋造 理事へ
電話・FAX
028-663-1313

BBS蓮談義での画像送信方法

当会のサイトで画像を送信する場合、ファイル（JPEG）72DPI-300KBまで（200mm×130mm程度）をデスクトップなどに置きます。
投稿欄から「投稿者名」メール（あなたのアドレス／なくてもよい）「題名」「内容」を書き込みます。
次に、画像の右側の参照ボタンをクリックしますと、「ファイルの選択」というウインドウが開きます。
ここで送信したい画像にマウスの矢印をあて、マウス左ボタンをクリックしますと、ウインドウの下「ファイル名」に目的画像ファイルのファイル名が出てきます。
次にその右側の「開く」ボタンを左クリックすると、ウインドウが消え、「投稿欄・画像」右の欄に画像ファイル名が書き込まれています。
これで「題名」の右側「投稿」ボタンを左クリックしますと、文章と共に画像が送信されます。もしどうしても分からなければ、ご連絡いただければ画面を見ながら電話で直接説明も致します。会員の方は遠慮無く申し出て下さい。　理事・千島秀元

蓮のQ&A

071 最古の蓮の陶器は？

それは「白陶封口鬻（はくとうふうこうき）」です。1977年、中国山東省莒県で出土し、同博物館に所蔵されているものです。今からおよそ6000年前の昔、新石器時代、大汶口文化の遺物で、高さ24㎝。3本の脚をもち、ふたの部分が蓮の果托状になっていて、全体が凝った特異な形をしています。雌蕊を思わせるふたの小さな穴から、湯気が出たり、しずくが付くことで、朝靄に浮かぶ蓮を彷彿させます。この陶器をよく見ると、作者がいかに蓮を光景と共に観察し造形に表現したか、当時の中国人の文化性に目を見張ります。

粘土を成形し焼成するものを、日欧では陶器とよび、石の粉（長石系）を混ぜて焼成するものを磁器とよびます。中国では、1000度以下の焼成物を陶器とし、それ以上の温度のもの、釉薬のかかるものを磁器とします。中国やオリエントにおいて土器類が作られるようになったのは、紀元前7000年頃のようです。

ちなみに日本では、縄文時代（1万年以上前）すでに土器が生まれていました。それは700～800度程度の素焼がほとんどで「縄文式」とよばれ、縄目のある器です。2500年～1700年前ころの器は「弥生式」とよばれ、日本各地から出土しています。いずれも低い温度で焼成され、硬度が低く、割れやすいものでした。約1500年前、大陸から1000度以上で焼成する、窯焼きの技術が伝わり、ようやく実用的な陶器が作られるようになりました。

白陶封口鬻は、かくも古い時代、すでに実用品から芸術品の域にまで達した陶器です。一般的な時代認識を変える作品といっても過言ではないでしょう（T）。

072 最古の蓮の玉器はなに？

それは、中国・唐代のものとされる「双鳳紋玉佩」（そうほうもんぎょくはい）でしょう。北京の故宮博物院に収蔵されています。

ところで玉（ぎょく）とは、乳白色や緑、青などの美しい石のことです。科学的にいえば、硬度が5～6ほどの軟玉（なんぎょく）と、硬度が7くらいの硬玉（こうぎょく）に分けられます。この硬度は、ダイヤモンド（硬度10）を基準としています。

写真の「双鳳紋玉佩」は、向かいあった一対の鳳（おおとり。あるいは鳳凰か？）が、すかし彫りになっています。その鳳たちは、蓮の花のうえに止まっています。鳳たちの尾は、雲紋（うんもん）とともに、高く舞うかのようです。

佩（はい）とは、身に佩（お）びることです。この中国最古の蓮の玉は、たぶん上部のあなにヒモをとおし、身につけたものでしょう。その主は誰か？　などと想像の翼を広げるのも楽しいです。

玉（ぎょく）にも色いろありますが、乳白色で古いもの（羊脂玉）であれば、最低でも、同じ重さの黄金の価値があるそうです（G）。

073 最古の蓮の青銅器は？

それは「晋侯臥壺（しんこうがこ）」（壺蓋上飾蓮花弁）です。1993年、山西省曲沃県の晋国の墓地から出土した一対です。西周（前10～8世紀）の作品と推定され、高さ58・4㎝、口径18×22・8㎝、腹径24×34・2㎝。ふたの部分に波状の蓮弁の装飾がなされている、きわめて荘厳な工芸品です（**写真右**）。

中国の青銅器は殷（商）以降、秦から唐に至るまで、鼎・酒器・食器・楽器・馬車の模様・文字・文章・透かし彫りを施した工芸など、粋を極めた作品として、おびただしい数が制作されています。

王其超先生の研究資料によると、最も優れた青銅器の蓮の作品は、1923年、河南省新鄭の李家楼から出土した一対の「蓮鶴方壺」だそうです（**写真左**）。それは春秋の中期（前5～6世紀）の作品で、高さ126㎝、口径は24・9×30・5㎝、重さ64・28㎏であり、方形をした壺です。その蓋の部分が蓮の花弁となり、中央に鶴が立ち、羽を広げて、いまにも飛び立とうとしているかのようです。

この春秋時代の蓮鶴方壺が、その後の時代の作品に勝るとも劣らない精緻な青銅器であることに、いまさらのように驚かされます。この一対の青銅製の蓮の壺は、北京の故宮博物院と河南省の博物館に、それぞれ収蔵されています（T）。

074 最古の金属の蓮はなに？

それは鳥獣紋蓮弁金碗（ちょうじゅうもんれんべんきんわん。写真）でしょう。唐代（618～907）のものとされ、北京の故宮博物院に収蔵されています。

取っ手の部分は確かに、鳥の頭とくちばしを思わせます。碗の糸じりからは、蓮の花の蕚（がく）と花弁が8枚、大きく、力強く、立ちあがります。そのうえに刻まれているのは、鳥たちや動物たちであり、いくらかデザイン化されています。その一部は、植物の文様であるかも知れません。

この金色で、8枚の蓮の花弁によって作られる空間は、それほど大きなものではないようです。どこで、どんな時に、ここに何を満たし、誰が賞味したのでしょうか？ 葡萄酒の可能性？ そんなことをフト思いました。

この鳥獣紋蓮弁金碗は、厳密にいえば、メッキされたものであり、金製とはいえません。ただ、メッキという技術が当時（10世紀以前）、すでに確立していたことは驚きです。金ムクで、古い蓮の芸術品を知っている方は、どうか蓮Q＆Aの編集部まで、ご一報ください（G）。

075 最古の銀製の蓮はなに？

それは蓮花銀碗（れんかぎんわん。**写真・左**）でしょう。6世紀の中国、東魏（534～549）の作品で、いまは北京の故宮博物院に収蔵されています。

中国の歴史では、強大な王朝ができる前に、短命な政権があります。漢のまえの秦、唐のまえの隋などです。その隋のまえの百数十年を、南北朝といい、興亡した政権は10を数えます。その1つが東魏（とうぎ）です。

東魏はわずか16年でしたが（秦は15年）、蓮の花の銀製の器を残してくれた点で、注目し、感謝します。ゆったりと広がる器は、よく手入れされるのでしょう、輝いています。波のような蓮弁が、そこを占めています。底にあるのは果托でしょう、小さな穴やオシベもあるようです。

銀は貴金属であり、金ほどではないにしても、腐食しにくいです。そのため歴代の中国では、金ではなく銀を、通貨の基本としました。銀本位制です。金融機関の銀行はその名残であり、銀座とはもと通貨（銀貨）をつくった場所のことです。中国で最後の王朝には、「龍紋大清銀幣」という、芸術品さながらの銀コインがあります。それはマニアたちの垂涎（すいぜん）の的です（G）。

076 最古の蓮の画像磚は？

それは、中国の漢代の「蓮池漁猟画像磚」（**写真・下**）です。画像磚（がぞうせん）とは、焼いたレンガに浮き彫りをほどこしたもので、壁の一部としたり、墓の内装に用いられます（今も、昔も同じです）。

この画像磚は、墓の内壁を装飾したもので（1984年、四川省三界里出土）、大きさは25㎝×44㎝。このほか「庄園農作画像磚」（四川省博物館蔵、縦3メートル×横3メートル）という大物もあります。

いずれも吉祥を寓意する動植物や行事、日常生活などが描かれています。蓮の花もその一例です。広大な蓮池や蓮田には、葉が茂り花が咲き乱れており、そこに舟を漕ぎ入れて、漁をとり、花を採取し、鳥を射ています。

蓮花文では、「蓮池画像磚」（1952年、四川省徳陽県出土）、「採蓮画像磚」（1978年、四川省新都里出土）などがあります（Z）。

古代の農業社会において大地は、作物を生産する恵みの地であり、生きていくための信仰の地でもありました。何時の時からか人々は蓮の花を、生産や吉祥を寓意する花として親しむようになりました。それは、仏教がインドから中国に入ってくるよりも、はるか昔のことです。

077 最古の蓮の漆器は？

漆器が歴史上に登場したのは、今から5900～6400年程前の中国のようです。長江下流、杭州市近くの河姆渡（かぼと）文化層で、漆塗り椀が出土しています。

日本では、今から４０００～５５００年程の前の縄文晩期、青森三内丸山遺跡から出土した、漆椀があります。八戸の是川遺跡からは木胎、籃胎の漆器が出土しています。

これらの漆器に絵、文様が描かれ、それが最古の「蓮」となるとやはり中国、前漢（ＢＣ２０６～）初期の耳杯（じはい）だと、王其超先生は書かれています。

（**写真・上**）は、その中心に千弁の蓮の花、その周囲に３匹の亀が描かれているとてもすばらしい作品です。

亀が水草をくわえたり、泡をはいている図柄で「蓮魚文」と呼ばれています。中国では蓮池の水禽図は、吉祥を寓意していてとても親しまれています。そこから「連年有余」（連年の余剰）や「年々有余」（毎年の余剰）などの吉祥語や吉祥図も生まれています。

また、魚と蓮の文様は韓国・武寧王陵出土の銅椀などにもあります。

日本では福岡県番塚古墳出土の太刀に、蓮の花をくわえた魚の文様があり、大陸文化の影響とつながりをみることができます。ちなみに英語で、china は陶磁器を、japan は漆器を、それぞれ意味するのも、興味ぶかいことです（K）。

078 最古の蓮の扇絵は？

扇の絵というのは、あまり大きくないのですが、その芸術的な価値はけっして小さくありません。蓮の花の咲く頃、それを自分のために用いるだけでなく、周囲の人たちの目にもとまるからでしょう。

絹や紙に描かれた作品は、残念ながら、その材質に寿命があるため、あまり古いものは期待できません。そうした理由から、南宋（１１２７～１２４９）、呉炳（ごへい）の筆になる「芙蓉出水図」が、最古の扇絵と考えられています。

宋朝（北宋と南宋）は、軍事的には強くありませんが、芸術や文化では唐代に比べていいほど、高い水準にあります。呉炳の絵はじつに写実的であり、立葉のうえに咲く大きな蓮を1輪だけ描いています。見事な花です。2日目でしょうか？ 条線がくっきりしており、花弁の先の部分の赤色がことのほか濃いようです。

手もとには、扇の絵だけを集めた『扇面之美』という画集などがあります。そこには蓮をふくむ花や、鳥たちが描かれていますが、呉炳の「芙蓉出水図」（北京・故宮博物院に収蔵）には、遠く及ばないという印象です。

この芙蓉（蓮）の品種名は？（G）。

079 日本最古の金属の蓮は？

それは、管見になりますが、峰ヶ塚古墳（大阪府）から出土しています。さほど大きくはない（**写真・下**）ですが、その数は約50個もあり、注目されています。

インドや中国と同様、わが日本でも、仏教が誕生する前から、蓮の花の文様をもつ装飾品が愛用されてきました。この歴史的な事実は、複数の古墳から、多様な蓮花文をもつ文化財が出土していることからも明らかです。

さて、峰ヶ塚古墳ですが、それは大阪府羽曳野市にある古市古墳群の南西部に位置しています。

5世紀末～6世紀初頭の築造と推定されていますこの古墳から出土した飾り金具は、蓮の花が満開の時、それを真上から見た状態のものです。それをクリアに切り抜いたかのような金具です。

その数、約50個。飾り金具のほとんどは銀製ですが、金銅製のものが数点含まれていました。蓮の花の大きさは直径が35ミリ～52ミリで、厚さは0.5ミリ。花弁の数としては8弁、7弁、6弁の3種類です。

花弁の彫金は優美かつ細密で、表面の仕上げは極めて細緻です。これらの花弁の先端には、2つの穴があいていることや、繊維が付着していたことから、スパンコールのように使用されていたものと思われます

同様の金具の蓮花文が「藤ノ木古墳」（奈良県）などからも出土しています（Z）。

080 正倉院のなかに蓮を探せば？

たくさん、ありそうです。

正倉院の御物は、聖武天皇の七十七忌に際し、光明皇后がその御冥福を祈って東大寺に献納されたものです。御物の種類は書跡、文房具、調度、仏具、服飾、楽器、武具、薬類、遊戯具など多岐にわたり、いずれも由緒が正し伝世品です。以下に、蓮の遺愛品を見てみます。

「蓮華残欠」は、花の高さが30センチ、池の長さが33センチで、蓮の花が咲く蓮池を模しています。蓮池の底は、

白緑彩で、白砂を敷き、貝殻を散らしあります。蓮は茎が金銅製で、花は金泥彩、葉は銀泥彩です（**写真・左**）。

「漆皮金銀八角箱」は、蓮台の上に2羽小鳥が乗り、そのまわりを蓮の花や法相華風の花や葉が鮮やかな色で描かれています。

「紅牙撥鏤尺」は、蓮台の上に小鳥が乗る文様の物差です。

「緑金箋」は、緑麻紙に金砂子を散らした散華であり、東大寺大仏殿の開眼供養の時、堂塔の鴟尾から散華したと思われるものです。現在三枚だけ残っています。

このほか、散華を乗せたと思われる竹製の「華籠」（天平勝宝4年の銘）、背面の飛鳥と蓮の花が出色で、特に蓮の花は象牙、緑染め野角、ツゲ、シタンで象眼されている4絃の「紫檀木画槽琵琶」、「白檀製の蓮華座」、「蓮華形鈴」、「蓮華形香炉台」（漆金薄絵盤）など、数えきれません（Z）。

081 天寿国曼荼羅のなかの蓮は？

まず、天寿国とは浄土世界のことです。

奈良・中宮寺蔵の「国宝　天寿国繍帳残闕」は、刺繍工芸品としては日本最古のものです。推古天皇30年（622）、聖徳太子が薨去しました。それを追慕し、嘆き悲しんだ妃の橘大郎女（たちばなのおいらつめ）は、往生して天寿国にあそぶ太子の姿をみたいと願い、推古天皇に「図像をつくって、太子御往生の姿を偲びたい」と願いでて、許されました。そこで、椋部秦久麻（くまべのはたのくま）を監督にして、たくさんの絵師達に絵筆をとらせ、多くの采女（うねめ）たちを動員して、一丈六尺の繍帳2つを薄い絹に刺繍させたのです。それがこの「天寿国曼荼羅」です（**写真・左**）。

もとは2帳であったのですが破損、紛失などで傷んでしまい、鎌倉時代に補修されて、縦89㎝、横83㎝の一枚に縫い合わされています。

その図様はじつに多彩です。仏像・神将・僧侶・庶民などが描かれているほか、鳳凰・兎・飛雲・唐草・蓮文様などがあります。蓮図は現在、かなり黒く見えますが、本来は青糸で刺繍された青蓮花のはずです。

ここでの蓮は、死後、極楽世界に往生することを願った人が、蓮の花の中に生を受けるという蓮華化生を表しています（K）。

082 「お練」のなかの蓮は？

「お練」すなわち二十五菩薩来迎会（らいごうえ）は、注目すべき仏教イベントです。その理由は、蓮と深く関わっているからです。

奈良の当麻寺（たいまでら）と中将姫のことは『蓮文化だより』11号を、彼女が織りあげたとされる「曼荼羅図」についてはQ&Aの040を、それぞれご覧ください。

姫が藕絲（ぐうし。蓮の糸）で曼荼羅を織るという話は、たとえ文学的な潤色があるとしても、いい物語です。彼女を西の浄土へ導いてくれたのは菩薩たちだそうです。この浄土思想は、『往生要集』を著わした源信（恵心、1017年没）の影響もあり、日本の各地に伝わりました。

今日につたわる「お練」は、宗派（浄土宗）の枠を超えており、それぞれの土地の特徴を備えています。ただ、姫（ないしそこの主人公）が坐るのは蓮台であり、蓮の花を手にした菩薩がいることは、ほぼ共通しています。

写真は大念仏寺（大阪）の「お練」で、金蓮の花籠（けこ）をもつ（妙音）菩薩です（G）。

083 隠岐島に蓮花舞があるそうですが？

あります。正しくは「隠岐国分寺蓮華会舞」です。島根県の隠岐島（おきのしま）の国分寺に、平安時代から継承され、国の重要無形民俗文化財指定です。現在は4月21日、国分寺跡で行われています。

隠岐国分寺は聖武期（724～749）に建立されましたが、明治の廃仏毀釈やたびたび火災にあいました。最近では平成19年、本堂や仏像、舞に使用する仮面もすべて焼失しました。それでも不死鳥のように蘇えり、蓮華会舞だけは継承されています。

この舞の起源はインドやシルクロードの流れをくむ伎楽で、無言の仮面劇です。江戸の記録によると、5年毎に旧暦6月30日（蓮華の日）を中心に奉納されたようです。ちょうど蓮の花の季節です。ここには「レンゲ田」などの地名

もあり、レンゲ弁当を作り、村民あげて五穀豊穣を祈り、楽しんだようです。

本堂前に、広さ4・5メートル四方、高さ1・2メートルの仮設舞台を設け、そこで披露します。舞の始まる前に、僧侶、世話役、演舞者が舞台下を三周します。これを行道（ぎょうどう）といいます。

舞の演目は、昔は120種ほどあったそうですが、今は「太平楽」「麦焼き舞」など7種のみ伝わっています。いずれも雅楽や狂言に見られる舞や農作業をコミカルに演じた独特の舞です。昔は、蓮の花が主役で、蓮の舞も奉納されたと思われます。現在の「仏舞」が往時を偲ばせます（I）。

084 蓮を詠んだ中国最古の詩集？

それは『詩経』です。いまから約2500年前、周代から春秋まで、中国の各地につたわる詩を1冊に集めたものです。それを編さんしたとされる孔子は、「詩三百、思い邪（よこしま）なし」と総評しています。

実際の『詩経』には、全部で305篇の詩があります。それらの詩風は、確かに素朴で、力強く、虚偽や無用な潤色がないのです。

山に扶蘇（ふそ）あり、湿に荷華あり（鄭風）
――山には扶蘇（草の名）があり、湿地には蓮の花が咲く（鄭の国の詩）
かの沢の陂に蒲と荷あり（陳風）
――あの沢の陂（そば）には、ガマと蓮とが生えている（陳の国の詩）

などがその好例です。いずれも実際の風景を詠んでいるようですが、後世の注釈では、想う男に会えない女の気持ち、としています。編者（孔子）の考えを聞きたいものです。

また、忘れてならないのは、屈原（くつげん。BC280?没）の『離騒』（りそう）です。戦国時代、楚の憂国（愛国）詩人だった彼は、「芰荷（きか。蓮のこと）で衣を制（つく）り、芙蓉（ふよう。蓮の花）を裳（きもの）となす」と、『離騒』のなかに詠んでいるからです。

写真・左は『詩経』の「採薬」を絵にしたもので、宋・馬和知の作品です（G）。

085 蓮を詠んだ日本最古の歌集？

それは『万葉集』であり、4首の蓮の和歌が詠まれています（数字は、番号）。

3289　み佩（は）かしを　剣（つるぎ）の池の　蓮（はち）葉（すば）に　溜まれる水の　行くへなみ　我（あ）がする時に
逢ふべしと　逢ひたる君を　な寝（い）ねそと　母聞こせども　我（あ）が心　清（きよ）隅（すみ）の池の池の底　我（あれ）は忘れじ　直（ただ）に逢ふまでに（作者未詳）

蓮の葉に溜まる水を譬えとして用いて、よるべなき恋の思いが歌われています。『日本書紀』には、635年7月に1茎2花の瑞蓮が「剣池」で咲いたと記録されています。

3826　蓮（はち）葉（すば）はかくこそあるもの意（お）吉（き）麻呂（まろ）が家なるものは芋（うも）の葉にあらし（意吉麻呂）

芋はサトイモのこと。作者（長（ながの）忌寸（いみき）意（お）吉（き）麻呂（まろ））は目の前にある立派な蓮の葉を見て、自分の家の蓮の葉はサトイモのようなものだと卑下して戯れた歌です。

3835　勝間田（かつまた）の池は我（われ）知る蓮（はちす）なし然（しか）言ふ君がひげなきごとし（作者未詳）

「勝間田の池」の所在地は不明。左注によれば、新田部（にひたべの）親王（みこ）が「勝間田の池」（写真・上）に咲いている蓮の花に感動して、その思いをある婦人に語ったところ、その婦人の詠んだ歌と説明されています。「勝間田の池」には蓮はありませんよ、親王の顔に鬚がないようなものですという意。「勝間田の池」には蓮が咲いており、親王の顔に立派な鬚があることを知っていて、戯れに詠んだ歌といいます。

3837　ひさかたの雨も降らぬか蓮（はち）葉（すば）に溜まれる水の玉に似る見む（作者未詳）

これも左注によれば、役所で酒宴が催されて料理が蓮の葉に盛られていたといい、同席していた右兵衛（うひょうゑ。武官）で、和歌に優れていたものが、他の人に勧められて詠んだ歌なのです。蓮の葉に溜まる水を玉と見立てたところが趣向です（D）。

086 インドの神話にみる蓮は？

たくさんありますが、宇宙の創造にまつわる神話を、2つだけ紹介します。

「原初に存在したのは水のみであり、その水の中から蓮の葉が浮かびあがり、黄金色の千の花弁をもつ蓮の花が開いた」（『タイッティリーヤ・アラニヤーカ』より）。

「水に浮かんでいるヴィシュヌ神の臍（へそ）から蓮が生え、その花からブラフマー神が生まれた」（『マハーバーラ

タ』より。図版）。

ヴィシュヌ神の別名は「ナーラーヤナ」で、そのナ（ー）ラとは、宇宙の原初の水のこと。ヴィシュヌの臍よりでた蓮からは、カイラスなどの聖山が生まれます。ブラフマーは創造の神であり、その心にマナサロワールなどの聖湖をつくり、そこから河が流れでます。

また、ラクシュミー神はヴィシュヌの妃であり、その別名に「パドマ・サンバヴァ」（蓮から生まれた者）、「パドマスティター」（蓮のうえに立つ者）などがあります。

蓮は、古代インド人にとって、太陽や星の象徴であり、天と地と結ぶ存在であると同時に、生産（殖）・豊饒・美のシンボルだったのです。

いまのインドでは、ハスもスイレンもみな「パドマ」であり、おもに色の違いでその名が異なるようです。友人の名前は、なんと兄がパンカジ（赤い蓮）、弟がニーラジ（青い蓮）です（S）。

087 中国の蓮の文人といえば？

古今東西の蓮の「詞・詩・和歌・俳句」で、最初に思い出す「うた」と聞かれて、答えるのは誰の「うた」でしょうか。管見ですが蓮に興味を持つ人なら、周茂叔の「愛蓮説」ではないでしょうか。日本ではシューマンの「蓮の花」が有名ですがこちらは睡蓮のようです。和歌、俳句、詩にも蓮の花を詠んだ秀句はたくさんありますが、すぐに思い出せる人は、よほどの愛蓮家です。

愛蓮説の作者、周敦頤（1017～1073）字は茂叔、号は濂渓。北宋の哲学者です。わずか119字の「愛蓮説」は、簡潔な文と比喩が巧みなことで知られ、蓮の文学史で最も親しまれている詩文ではないでしょうか。特に、「淤泥より出て染まらず」は、蓮の花を表現するときにたびたび引用されて来ました。また、「花中の君子」の表現ですが、蓮の花をこれ以上の褒め讃えた言葉はあるでしょうか。

「愛蓮説」は、宋の黄堅が、中国の戦国時代から宋までの詩文を集めた『古文真宝後集』（前集は詩文を後集は文章を集めたもの）に収められ、元・明時代に広く流布しました。わが国に室町初期に伝来すると、僧侶達の必読書となりました。江戸時代には、漢文学者だけでなく、中国詩文を学ぶ人達に広く普及し愛唱されました。また、画家、書家の画題になり描かれています。

図版は、国宝「周茂叔 愛蓮図」（狩野正信、東京国立博物館蔵）（Z）。

088 日本にも蓮の文人がいた？

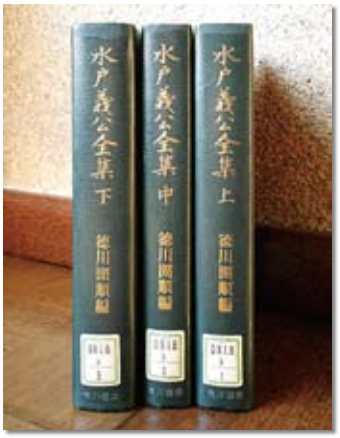
いました。意外かも知れませんが、水戸黄門すなわち徳川光圀（義公、1628～1700）を推薦します。講談やテレビでお馴染みの黄門さまが、諸国を漫遊して悪人を懲らしめるというのは史実ではありませんが、彼は実在の人物です。

光圀公はその政治的手腕だけではなく、文人としても面目躍如たるものがあり、実にたくさんの文章、和歌や漢詩を残しています（右は、その全集）。多くの題材を詠んでいますが、それらの中には「蓮」を題材にした作品もあります。和歌は3首のみですが、漢詩は20首以上にわたっています。各1首のみ紹介します。

白玉をはすのひろ葉にゆりすへてひちりにそまぬ月そやとれる（『常山詠草』204）

—大きな蓮の葉にたまった玉のような露、清澄な月影を映した美しい情趣を醸し出しているという趣向です。

芙蓉今示瑞　分鹽共同莖
大小色爭美
夷齊香益清
紅衣浮水潔
綠蓋受風輕



池浸連不影
雙雙花弟兄
（『常山文集』137）

—水をたたえた池の面に蓮の葉が翻り、1茎2花の対をなした紅の蓮の花が咲き競っているという趣向です。

蓮の清々しい美しさを、伯夷叔齊（斉）の兄弟の故事にたとえています。詩中の「芙蓉」は蓮の花の意。題詞によれば、「唐蓮」が始めて「雙（＝双）頭」の花を咲かせたとあります。このような花はめでたいことのしるし（＝瑞兆）として扱われています。

光圀公には、後楽園の池（水戸藩の上屋敷内）に咲いた双頭蓮を詠んだ漢詩（『常山文集』622）もありますが、その詩の中では「瑞蓮」と表現しています（D）。

089 インドの古詩にみる蓮は？

きわめて興味ぶかいです。例えば、『古代インドの神』（オドン・ヴァレ著）に「蛇の上で休むヴィシュヌ神と、ヴィシュヌ神の臍から生えている蓮の上に立つ創造神ブラフマー」という、絵が載っています（写真・次頁。細密画、16世紀）。

それとそっくりの情景が、松山俊太郎著『インドのエロス』のなかの詩にあります。「…／臍の蓮花に坐るブラフマーをみとめたラクシュミーは／欲情の漲るゆえに／ハリの右目を　たちまち　蔽ってしまう」という部分です。

その詩の解説には、「ラクシュミーは吉祥天、繁栄と美の神さまであり、もとは大地母神で、蓮花（れんげ）の神さまでもあります。インド人は、大地そのものが蓮花と考えています」とあります。

インドの古詩には、ハーラー編『サッタサイー』や、詩聖カーリダーサの作品など多数あり、そのなかの多くに、蓮が描かれています。その描写は、「両腕は蓮の茎顔は蓮

花」「蓮花のような切れ長の目」「蓮花のような手で」「青すいれんできみの目を、蓮花で顔を…創造主はつくってくださった」などと、女性の美しさを讃えています。また「手に弄ぶ蓮花で打たれた色男」なんていうのもあります。ちなみに『上田敏全訳詩集』に印度古詩6篇があり、そのなかに「きみがまなこは青蓮に（バルトリハリ作）」があります（O）。

091 『源氏物語』のなかの蓮や荷は？

けっこうよく登場しています。それらを実際の蓮（花）と、荷葉（かよう）という香に分けることができます。ここではおもに前者を取りあげます。

『源氏物語』のなかに蓮（はちす、はす）は、神野藤教授のお話（特別講演、蓮文研の総会、２００８年）によれば、全部で20回も登場するそうです。なかでも、「夏ごろ、蓮（はちす）の花の盛りに、入道の姫君の御持仏ども…」（鈴虫）のくだりは、出色です。「入道の姫君」とは、出家した「女三の宮」（源氏の妻だった）のこと。

彼女の持仏のために、盛大な開眼供養がとり行なわれたのです。その様は、夜の御帳台の帷を4面も開き、仏の背後には曼荼羅を飾り、水の入った閼伽（あか）には「青き、白き、紫の蓮を調へ」というもの。ここに書かれている「青い蓮」「紫の蓮」とは、どんなものだったのでしょうか？

当然のこと、この持仏開眼の場面には、荷葉もくゆらせてあります。荷葉は、平安時代によく用いられた6種の香の1つで、夏の室内で用いられたものです。これについては、蓮Q&AのEグループ42「荷葉」を、ご覧ください。

『源氏』の千年紀にあたる今、悠久の歳月を超えて、往時の蓮に想いを寄せながら、当時の荷葉を再現できることを、幸せに思います（KA）。

092 『風土記』のなかの蓮は？

『風土記』とは和銅6年（713）元明天皇の命によってまとめられた地誌。諸国の郡郷、地名の起源、土地の肥沃の状態、伝えられる引聞異事などを記したものです。

ほぼ完本で現存するのは、天平5年（733）の日付が残る『出雲風土記』だけで、他の『常陸風土記』、『肥前風土記』、『播磨風土記』、『豊後風土記』は、一部が伝わっています。蓮の記述をみてみます。

『出雲風土記』には、「養老元年より以往は、荷葉（自然　叢れ生いて太だ多かりき。二年より以降、自然　失せて、都べて茎なし」（養老元年までは、蓮がたくさん生い茂っていたが、養老2年以降は自然になくなった」とあります

『常陸風土記』には（上）、「蓮根は、味気　太だ異にして、甘きこと、他所　に絶れたり。病める者、此の沼の蓮を食へば、早く差えて験あり」（蓮根は味がよく甘さは他所のものより勝れている。病気の人が蓮根を食べれば早く治る。）とあり、蓮根は生薬として、食されていた様子が、記されています。

『肥前風土記』には、「荷、菱、多に生ふ。秋7、8月に、荷の根甚甘し」（〈池に〉蓮、菱が多く生えていて、7～8月の蓮根は大変美味しい。）とあり、旬の蓮根が食卓を飾っています。

蓮根は古くから生薬や食料として活用されていました（Z）。

093 『本草綱目』のなかの蓮は？

それは驚くべき内容です。なぜなら『本草綱目』（ほんぞうこうもく）では、蓮という植物を、根・茎・葉・花弁・雄しべ・めしべ・花托や果托・実・実の芯などに分けて、それぞれの薬効を論じているからです。例えば、

蓮の実―甘く、渋く、無毒。百病を除き、常服すれば年（齢）を延ばす。

蓮の葉―苦く、無毒。渴を止め、産後の口の乾きを治す。

蓮の花―苦く、甘く、無毒。心神を安らげ、顔（色）を養う。

レンコン―甘く、無毒。熱による渴を治し、五臓を滋（うる）おす。

蓮の実の芯―苦く、無毒。貧血や産後の渴を治す…という具合です。

李時珍（りじちん。写真は、郷里の湖北省にたつ像）のこの畢生の巨著（全52巻、1892種を収録）が刊行されたのは、1596年（明代）のことでした。それは彼の死後3年目のことです。

日本にこの『本草綱目』が紹介されたのは、1607年、林羅山（はやしらざん）によってでした。彼は徳川家康のブレーンでもありました。

なお、中国で蓮（レンコン）の薬用に注目した最初は、漢代の薬学書『本草経』（ほんぞうきょう）です。それは今から約2000年も昔のこと！（G）。